



特別公開講座を行いました

2月中旬に、全リーダー必修の「冬期全体研修会」を行いました。野外活動の基礎知識、子どもの発達や子どもへの言葉がけといった、リーダー活動にダイレクトに役立つ講座にとどまらず、社会全体へ視野を広げた内容も扱っています。中学生から社会人まで、経験も居住地も様々なメンバーにとっては、年に三回の貴重な交流の場ともなっています。

今回は、特別公開講座として、1999年11月に起きた東名高速飲酒事故被害者で、その後の法改正に尽力されている井上保孝・郁美ご夫妻にお話を直接伺いました。ご夫妻が事故で喪った娘さん姉妹の、下のお子さんが当会にご参加になっていたご縁で講師を快諾くださり、講演が実現することになりました。めったにないことです。リーダーだけではもったいないと、広く一般のご参加も呼びかけ、当日はリーダーのOB・OGも含め盛況となりました。

ご記憶にある方も多いと思いますが、1999年11月28日、ご夫妻は、箱根への家族旅行の帰りに、東名高速道路上で、過去数時間にわたって蛇行運転が目撃されている飲酒運転のトラックに追突され、当時3歳と1歳の子ども2人を焼死させられました。長く飲酒運転を常習としていた加害者にくだった刑は懲役4年でした。想像を絶する苦しみの中、お二人は署名活動を通じて法改正に取り組まれ、「危険運転致死傷罪」新設などの成果を残します。その後、飲酒運転への社会のまなざしが格段に厳しくなったことは、ご承知の通りです。

活動の中で、事件を風化させずに、リアルに伝えていくことの難しさを感じたとおっしゃっていました。ご自宅で2時間取材をした記者が「箱根で撮った写真を貸してくれないか」と言ったそうです。ご家族が乗っていた乗用車は、ほとんどのが焼け残らないほど火に巻かれたのです。写真など残っているはずありません。しかし、その場にいなかった者にとって、いかにその前に長く詳しく話を聞いたとしても、なかなか細部にまで想像が及ばないのでしょう。

また、「私」のことから「公」のことに、問題を変換していかなければ、社会は変わっていかないというお話もありました。事件や事故の被害者が社会に対して問題意識を持つきっかけは、あくまで私的な事柄です。自身や家族が傷つけられるというような。その悲しみは深いものでしょう。しかし、そこでとどまっていたは、他の多くの人々を巻き込んだ変化を生みだすことはできない、という言葉に深くうなずきました。

リーダーたちにとって、大きな印象と活動への糧が残る講演会となりました。井上さんご夫妻、そしてご参加くださった保護者の皆様ありがとうございました。



「寒中子ども会」開催

2月の週末を使って、「寒中子ども会」を行いました。詳しい行事の報告は、子ども版『くさぶえ』に掲載しましたが、印象的だったのは、子どもたちの「遊び尽くすんだ」という意志と意欲です。カロムやヤカーリング、穴釣りなど初めてやる、という子も多い中、集中力の高さには驚かされました。班の仲間や友だちへの声援も大きく、短い期間に密度の濃い関わりが生まれたのではないかと思います。

初挑戦の「ヤカーリング」も非常に盛り上がり、ホンモノ気分が味わえたとのこと。さっそく、来年の寒中でも、という声が上がっています。ご参加くださったみなさん、ありがとうございました。



地域シンポジウムに参加

愛知県豊田市で行われた、「いなかとまちのくま座ミーティング」に、会代表綾崎(でこびん)がご呼びいただき、テーマ別分科会の講師として参加しました。主催の『おいでん・さんそんセンター』のキャッチコピーは「まちとむらをつなぐプラットホーム」。平成の大合併により県内一の大きさになった豊田市は都市部だけでなく、過疎化・高齢化が進む農村部の両方を抱えます。双方が支え合う未来の暮らしを考えるために、今回で3回目を迎える、この会が開かれました。

綾崎が参加したのは、「次世代育成：子どもとともに地域をつくる」というテーマの部会です。子ども同士の対等な関係を育むことの意義や、その実践についてお話ししました。

綾崎いわく、「アルプスは第100回をめざすぞと考えていたけれど、1000年持続という概念を知り、100年なんて甘いと思われた」とのことで、いただいた、たくさんの刺激をまた会の活動に生かしてまいります。

どーもくん駒ヶ根に

「15冬の子ども会」あそびのかんづめA組に、NHKの取材が入りました。人気キャラクターどーもくんが各地を回って、子どもたちと遊んだり、その地域を紹介したりという番組で、当地駒ヶ根が取り上げられるのに伴ったものです。

当日、どーもくんは「アルプスオリンピック」に参加。専用の長靴を履いての靴飛ばしから、ベルトをつけてしっぽとり、はちまきをつけて紅白対抗の王さんと、大活躍でした。午後には餅つきにも加わってくれたので、子どもたちは大喜び。現地スタッフの「ごはんぐんだん」をはじめとした大人たちも、何でもこなす、どーもくんに興味津々でした。

放映は、3/22(日)8:55～NHK BSプレミアムです。ぜひご覧ください。山ろく荘からのぞむ中央アルプスをバックに遊ぶ子どもたちとどーもくんの姿がうつるはずです。

「冬の子ども会」アンケートより

「15冬の子ども会」にご参加くださった方から寄せられたアンケートを、「春の子ども会」案内書にて抜粋いたしました。載せきれなかったものが多数ありますので、こちらでもご紹介いたします。

♪帰ってきた時の顔が、大人びて見えました。思うように魚はつれなかったようですが、最後の日も「なんとか家に持って帰りたい」と頑張ったとのことで、結果は思うように行かなかったものの、話して聞かせてくれる様子は、なんとも清々しいものでした。【新潟県新潟市 Kさん】

♪いつもキャンプ後にあまり話が出ないのですが、今回は「リフトに〇〇と〇〇と一緒に乗った」「まんぶくパーティーのミートボールパスタが美味しかった」「出し物大会で司会をやった」等、細かい話がよく出て来て楽しんでいる姿が目に見えられました。おかげさまでスキーもかなり滑れるようになったらしく、自信たっぷりです。少し反抗期の入口で、毎日ささいなことで親子で言い合いになったりするので、お互いに解放され、楽しいお正月を迎えられそうです。【東京都渋谷区 Yさん】

♪娘は昔からのんびり&マイペースで、保育園の頃はそれでも先生方のフォローがあり、なんとなっていたのですが、1年生になり、本人はあまり気にしていないのですが、集団生活になじまないのではないかと日々心配していました。アルプス子ども会のパンフレットをたまたま図書館で拝見し、その理念にはっとさせられました。夏の子ども会は出発時こそ泣いて騒いで大変でしたが、帰ってくると「楽しかった!!」冬の案内が来ると「絶対行くからね!!」、今回も帰ってくると5日間のできごとをしゃべり通しです。家や学校での様子、行動が何か目に見えて変わったというわけではないのですが、素敵な得難い経験をたくさんしてきたことはよく伝わります。【東京都渋谷区 Sさん】

♪帰ってくるなり、「5日前に戻りたい」と、その一言で楽しいキャンプだったことがわかりました。スキーの話、友人、リーダー、食事……とつきることなく、毎日楽しかったことを話しています。【東京都大田区 Uさん】

♪食事がとてもおいしかったそうで、出発前より1kgほど増えていました。「お母さんも、しぶき荘みたいなご飯作ってよ」と言われて困る母……。「ムリです。またご飯食べに行ったら?」と言っておきました。雨の中のついせきハイキング、とても大変だったそうですが、みんなが一緒だからがんばれたと。ぐっしょりぬれた靴、帽子などなど。

現地の担当の方はさぞかし大変だったのではないかと思います。人間としてひとまわり成長できた、充実した冬休みになりました。【愛知県日進市 Mさん】

♪はじめてのスキー。とにかくケガがなければと送り出しましたが、満面の笑みで「すごく上達したんだ!」と言いながら帰ってきて、ほっとしました。その後、家族でスキーをする機会があり、自分で板をはき、リフトに乗って中級コースも難なく滑る様子を見て、本当にびっくりしました。スキーの心得を沢山、私にも教えてくれ、ふざけず、危険のないようにできていました。【愛知県稲沢市 Iさん】

♪友だちづくりは得意な方だと思いますが、協調性においては不安な部分もありました。ですが、帰ってきたとき、リーダーさんにいただいたお手紙に、Aのよいところをたくさん書いてくださりとてもうれしかったです。どういう生活をしていたか、ビデオで撮影してほしいと思うくらい、Aもたくさん思い出を話してくれました。帰りの電車では、「おひざで寝てもいい……?」と。甘えん坊なAががんばった証拠だと感じました。日常生活でも、「自分でやる!」「次は何をしないといけないか?」など、びっくりするほど変化が見られ、考え方も少し変わったねと家族も驚いています。学校では得られないたくさんのものを得られたようです。【三重県松阪市 Kさん】

♪自分の「浅い」経験に照らしてみても、やれそうなことにしか手を出さない子が増えています。わが子もしかり。「白馬プラン」に参加するのは、周囲からすすめても「でも……」「けど……」でギリギリまで迷っていました。……で、そこで登場したのが、アルプス育ちのお姉ちゃん!!アルプスのスキーの志賀や白馬がどんなに楽しいか。リーダーさん達がいかに上手にみんなをひっぱってくれたか、しゃべるしゃべる。中にはまだ聞いたことのない秘話(途中でおしっこに行きたくなって自分だけトイレに連れてってもらったり……だとか)もあったりして、「リーダーさん達ありがとうございました。」と頭の下がる思いもしました。その彼女の演説、説得の甲斐あって、本人は白馬に参加。ニコニコ笑顔で戻ってきました。【京都府京都市 Hさん】

同質性を求める傾向に^{あらが}抗うことの大切さ

綾崎 幸生

先日、愛知県で面積が最も大きい豊田市が主催する「いなかとまちのくるま座ミーティング」に招かれて話をする機会を得ました。平成の大合併で市街地から山間部まで車で1時間半もかかる市域になったそうで、多くの、実にさまざまな人びとがすばらしい町・村おこしに取り組まれており、その熱心な姿に驚かされました。



各季節の子ども会の募集期間になると、決まって「〇〇コースには〇年生が何人位参加するか」「〇組に女兒はどの程度いるか」といった類の問合せを受けるようになりました。

かねて料理コースの男児や「つり道場」の女兒の割合を気にするくらいはありましたが、近年は、誰でも参加しそうな一般的なコースに対してさえ、我が子と同じ属性の参加者がたくさんいるかどうか、懸念を抱く人が間違いなく増えているのです。仮に子どもがそうした不安を口にしたところで、大人が「いろんな人がいるからこそ面白いんだ」と伝えれば済むことなので、恐らく親自身が心配なのでしょう。

子どもが何をしたいのか、自分の子に何をさせたいかの意志は二の次で、他人の動向が優先されてしまう困った心理ですが、そもそも、普段学校で厭と言うほど同質社会に浸かっている中、校外で異質のものに接することができる絶好のチャンスが当会のような野外活動です。

いろいろな子と一緒に生活すると、大きくてもできないことや小さくてもできることがあったり、強そうでも苦手なことがあり弱そうでも得意なことがあったり、知らずと異質性の心地よさを獲得していきます。それらの体験は自らの弱さをさらけ出して助けを求める力や、あるい

は誰かの弱点に気づいて補い支えようとする力につながります。

そして、それら薄い膜のような経験一枚一枚の積み重ねが、共感や共鳴を生み、他者に思いを馳せるようになっていくのでしょうか。逆に、自分と異質なものに向き合わなければ、当然不都合な事態に対処できるようになりませんし、本来の自己肯定観が育まれるはずがありません。若者が「あり得ない」「信じられない」と簡単に言ってしまうのも、ずっと同い年の同性ばかりで過ごしているからです。

また、元来生き物は環境の変化に対応し多様化することで生きながらえました。特に昆虫は、食物にする生物種を細分化して次世代を残します。同じ蝶類でもモンシロはキャベツ、アゲハは柑橘など、中には厳冬の山中で生き抜くフユシャクガといった変わり種もいます。

人間も社会環境の変化に対応するために、妙なことをする人、異なる視点は欠かせません。災害に即した行動にも、同様でしょう。

20年近く前に文部省大学審議会は、日本の大学院を「学生・教員の同質性が高すぎて、学問的刺激が弱い」として、異質なものの交流の中から新しい発見やヒントを生む重要性について述べています。小学校などでは学年縦割り行事を採り入れ、異業種交流や学際研究などもかなり前から広く行われています。

一方で、同調圧力を過剰に受け止める傾向はどんどん強まり、「みんなが行くなら行く、みんながやらないならやらない」現象が進んでいるように見えます。「ありのままで」や「個性の尊重」は叶わぬ理想でなく、各自の内面に重ねたいものです。（でこびん＝会代表）